施設老人のケアとボランティア活動のあり方

——特別養護老人ホーム・梅寿荘[1]とコミュニティ——

片　野　　卓*・吉村可那江**

The Proper Attitude toward the Care of the Aged in Nursing Homes and Volunteer's Activities

— Relation between Baiju-So, Special Nursing Home and the Community —

Takashi KATANO and Kanae YOSHIMURA

……寮母さんと話をするのは〝テレビ〟を観ているようなものやが，ボランティアの奥さんと話をするのは〝生(なま)〟やさかえ，とっても楽しい……　Mさん（在所老女）の洩らされた呟き

はじめに

本稿は，特養施設老人に関する既発表，拙4論文[2]の続編に当るものであるが，昨年(81年）発表の第4論文，「長生きする老人の条件」を要約することから始めたい．

特養施設において，「長生きする老人の条件」を加藤正明の事例性（caseness）の概念[3]にそくしていえば，彼らは，入所以前の過去の生活にこだわることも，またとくに神仏にたよることもなく，現在の施設生活を充分楽しみかつ幸福だと感じるようなポジティブな心情のもち主，つまりきわめて“アッケラカン”としたパーソナリティ特性の老人であることが浮きぼりにされた．したがって，死ぬ場所としては近代的な設備の整っている施設でと答えながらも，最後をみとって欲しい人物は寮母その他の施設職員ではなく，プライマリーな“家族”にと願う老人が圧倒的に多いという事実が解明されて驚かされた．

こうした“アッケラカン”と“したたかさ”をもった長命老人の実態ももちろんそうだが，そうでない施設老人のすべてにいえるのは，日常生活の中にいかにプライマリーな人との直接的な，血の通った接触を求めているかということである．冒頭に記したM老女のふと洩らされた「ボランティアの奥さんと話をするのは〝生〟やさかえ楽しい」という実感のこもった言葉こそ，コミュニティぐるみのボランティアの方向を示すものとして貴重である．

※

さて，高齢化社会の深度が増大するにつれ，老人問題は個人的レベル(家族的扶養など）から社会的レベル（社会保障など）へと移行していくが，森幹夫は後者の移行のしかたに3段階あることを指摘し，「経済扶養の社会化」→「介護扶養の社会化」→「死の社会化」と述べている[4]．「経済扶養の社会化」とは前記の社会保障や公的扶助などがふくまれる

* 社会学研究室　**梅寿荘主任寮母（昭和57年9月30日受理）

が，「介護扶養の社会化」は主として在宅老人と施設老人の福祉の２つの領域に分けられよう．施設老人の福祉に関していえば，とくに養護・特養入所者からの自己負担金徴収制度が80年８月に実施されてからは，入所者やその家族に施設とは利用するものであり，また施設職員は福祉のサービスの提供者だという意識を強化させることになり，施設はコミュニティ・オーガニゼーションの中に位置するものとしてその機能を地域社会に開放するなど，いわゆる施設の社会化がつよく叫ばれるようになった．

こうした施設の社会化には，２つの意味がこめられていよう．１つは，従来のように老人福祉が施設職員その他の専門家の手にのみゆだねられるのではなく，コミュニティぐるみで行われるケア，つまり老人にたいし養護扶養の社会化をはかることである．換言すれば，施設のもつ閉鎖性をみずから打破し，自由でオープンなものに変革していくこと．２つはステレオタイプ化しがちな“上”からのケアではなく，可能なかぎりプライマリーな雰囲気の中で徹底した老人の個別的ニーズに即した処遇を行なうことによって，いわゆる老人のアノミー化を防ぎ，喪失しつつある社会性（人間性）の回復をはかることである．「終の棲家」ともいわれる特養施設の場合は，とくに“安らかでかつ尊厳なる死”へいざなう場としての，こうしたプライマリー・ケアが最高度に要請されよう．

こうした意味で，「養護の社会化」と「死の社会化」は相互にオーバーラップした連続概念としてとらえるべきであるが，いずれにしろ，扉を開放した施設のあり方とコミュニティとの間の橋渡し役としてのボランティア活動の方向を探ることは，80年代老人福祉の大きな課題ということができる．

本稿は，上記の問題意識をふまえ，事実上年間1,500名以上（延）のボランティアを受け入れているわが国でも稀有な特養施設・梅寿荘をフィールドとしたボランティア活動の実態分析を行ない，あわせて将来のボランティア活動の方向性を探ろうとするものである．

Ⅰ　当荘ボランティア活動の量および内容

まず，わが国でも稀有な当荘ボランティア活動の実態を紹介しよう．

a)　圧倒的に多いボランティア数

多少古いが，全社協の調査[5]（'76年10月実施）によれば，県内のボランティアの総人数は28,069名（延）であり，うち老人福祉に参加している人たちは6,432名である．老人福祉参加者とはいえ，この数字には在宅老人にたいするボランティアもふくまれていたものと考えられる．が，かりに彼ら全員が老人施設ボランティアだったと仮定して計算すればつぎのようになる．すなわち，当時県内には老人施設が計25（特養８，養護10，軽費７）存在していたので，１施設当りのボランティア数は257名強である．

ところが，当荘のボランティアは実数355名（うち定期182名，不定期173名）にものぼっており――県の場合は総（延）数であることに注意――いかに多くのボランティアが当荘に動員されているか，その特異性が容易に理解されよう．ちなみにこうした状況は，当荘開始（'72年８月）当初からのものであったが，最近数年間はだいたい年間1,500名（延）前後を数えており，'81年では1,547名を記録している．

b)　実質的で多様な活動内容

ボランティア活動の内容においても，当荘の場合は，他と比較してかなり実質的かつ多様なものがみられる．

１表は，先記の全社協調査と当荘の定期ボランティアの内容を順位別に比較したものである．

（1表）全社協調査と梅寿荘定期ボランティアの内容別順位

順位 対象	1位	2位	3位	4位	5位
全社協 (76年10月)	慰問 40.5%	労力・作業 9.6%	技術 8.7%	行事 6.0%	対人・介護 3.4%
梅寿荘 (81年)	対人・介護 50.4%	技術 34.4%	労力・作業 8.7%	行事 6.2%	慰問 0.2%

この表を一瞥すればわかるように，全社協調査ではボランティア活動の内容（目的や役割）の多くが慰問におかれており，労力や作業奉仕，技術，行事，対人や介護面はごくわずかである．が，梅寿荘においてはまったく逆に，慰問は最底で，対人や介護面が過半数を占め，技術面での奉仕も3分の1弱となっている．梅寿荘ボランティア活動の内容が，施設老人へのたんなる主観的な慰謝（同情心）行為におわらず，かなり実質的な働らきかけ（接遇行為）まで行なわれていることは注目されてよい．

ちなみに，当荘ボランティア活動の具体的な内容や種別，人数，所属団体などを整理してみると，つぎのようになる（2表）．

（2表）梅寿荘ボランティアの内容，種別，人数，所属など

内容	種別	人数(延)	定・不定期	所属団体	主な居所
対人・介護	買物サービス	188名	定	いこま保育園愛護会	生駒市
	果物サービス	87	〃	ガールスカウト	奈良市
	喫茶サービス	142	〃	いこま保育園愛護会	生駒市
	特浴サービス	158	〃	カトリック教会	奈良市
	所外買物サービス	120	〃	いこま保育園愛護会 いこま女大学	生駒市
技術	カット・理容サービス	156	〃	家族，法人，個人	生駒・大阪・奈良
	活花教室	86	〃	法人関係	奈良市
	陶芸教室	112	〃	いこま保育園愛護会	生駒市
	造花教室	48	〃	同上	同上
	くみひも教室	72	〃	大和服飾学院	天理市　奈良市
労力・作業	おむつ縫い	120	〃	天理教 虹の会(婦人グループ)	東大阪市　生駒市
	清掃	149	不定	レオクラブ，ボーイ・ガールスカウト，地域婦人	生駒市　奈良市
行事	誕生会	60	定	法人関係	生駒市
	盆おどり	20	〃	地域商店会グループ	同上
	餅つき	5	〃	ライオンズクラブ	奈良市
慰問	慰問	24	定・不定	個人，大学落研	奈良市　大阪市
		計1547			

このように，多種多彩なボランティア活動が当荘では展開しているが，それには少なくとも2つの理由が考えられる．

1つは，当荘のもつすぐれて独得な組織形態とその運営・マネジメントのあり方，2つ

は当荘のおかれた社会的（地理的）条件の有利性である．前者に関しては，他の多くの老人施設にみられるような1法人1施設といった組織形態をとらず，乳幼児期から青少年期そして老年期に至る一貫した福祉問題を法人組織の傘下に集めているという点である．すなわち，宝山寺福祉事業団という1社会福祉法人の下に，じつに9つの施設（乳児院1，乳児保育園1，保育園3，児童養護施設1，障害児通園施設1，青少年野外研修センター1，特養施設1）を機能的に運営しているが，とくに当荘のボランティア活動は同じ生駒市にある「いこま保育園」の後援団体である“いこま保育園愛護会”が中心となって組織されており，当荘開設準備期からすでに宣教活動が開始されていたのである．加えて，当事業団は仏教系の組織であり，施設長自身も僧籍にあるにもかかわらず，キリスト教系や天理教系その他あらゆる宗教団体のボランティアを快く受け入れることを施設の方針としており，施設長がライオンズクラブやボーイスカウトなどの団体にも加入し，こうした面での啓蒙活動やボランティア受け入れにも積極的であることが大きな理由といえる．

後者の社会的条件としては，当荘の所在地が大阪と奈良との中間にあり，交通(通勤)至便で景観上もすぐれた新興ベッドタウンに位置していること．したがって相対的に生活水準や教育程度の高いニューファミリー層が多く居住しており，たとえば「いこま女大学」とか「虹の会」，「善意銀行」，「小さな親切運動」，「労力銀行」，「奈良“いのち”の電話」，「生駒カウンセリング研究会」などの住民（市民）運動がひじょうに盛んな特殊文化的地域であることは見逃せない．

c）　**ボランティアと老人との接触**

当荘のボランティア活動は，主観的な慰謝（慰問）の段階をこえた実質的な接遇行為の領域にまですすんでいる点は先にふれた．が，具体的にはどうか．他の特養施設での調査資料は不幸にしてもち合わせていないので比較不能であるが，当荘ボランティアたちが老人とどのような接触の仕方をもっているかを，以下考察してみよう．

3表は，老人との接触時間および接触場所などを整理したものである．

（3表）ボランティアの老人との接触時間および場所など

内　容		月間回数	1回に接する老人数	接触時間帯	直接接触時間	場　所
対人・介護	買物サービス	4回	全　員	1.5時間	0～20分	居　室
	果物サービス	4〃	〃	1.0 〃	0～10〃	同　上
	喫茶サービス	12〃	30名前後	2.0 〃	20〃	喫茶コーナー
	特浴サービス	4〃	40 〃	2.0 〃	10〃前後	居室，廊下
	所外買物サービス	1〃	15 〃	4.0 〃	4.0時間	往復のバス，お店など
技　術	カット・理容サービス	3〃	15～30名	2～3 〃	20分前後	ホール
	活花教室	4〃	10名前後	1.5 〃	1.5時間	集会所
	陶芸教室	4〃	10 〃	2.0 〃	2.0 〃	作陶場
	造花教室	4〃	10 〃	1.5 〃	1.5 〃	集会所
	くみひも教室	4〃	15 〃	2.0 〃	2.0 〃	同　上
行　事	誕　生　会※	1〃	30名～110	1.0 〃	1.0 〃	集会所，居室

※　誕生会はバイキング形式で行なう場合は各居室へワゴンで廻るため，全員がボランティアに接することになる．

以上は，ボランティアたちが老人と接触する物理的側面（時間，場所など）を表にしたものであるが，その関わり方にはさまざまあり一概にはいえない．そこで，以下，主だった接遇内容をかんたんに説明しておきたい．

対人・介護面でもっとも接触時間の長いのは所外買物サービスであり，出発から帰荘まで1対1の介護となり，商品への趣味・趣向はもちろんのこと，身のうえ話その他の話題が施設外という自由な雰囲気の中で出るので，もっとも効果的である．ただし，戸外買物に出ることができるのは，障害度が軽く性格的に積極性のある老人ということになり，少数の人にかぎられる．果物サービスは，居室内をガールスカウトの高校生グループがワゴンをひいて廻るものである．だが，スカウトたちの帰宅時間が制限されていることなどがあり，とくに効果的とはいえない．しかし，菓子類を主とした買物サービスの方は，10年近い歴史と主婦グループによるサービスであり，いかにも家族的な雰囲気が生れたりコミュニケーションが深まるという効用性がみられる．特浴サービスは，特殊浴槽を利用する重度障害者の送迎，浴後の爪切り，水分補給，入浴中のシーツの交換，着替え衣類の準備など，いわゆる直接処遇に類する作業であり，そのため老人との心の触れ合いが濃密となる．が，ボランティア一人の特浴は月1回と限定されていることや，重度障害者との関わりのむづかしさの点もあり，胸襟を開いた対話までは生じにくいことも事実である．喫茶コーナーは週3回開かれるが，ボランティアは月1回のわりでコーナーでサービスすることになっている．ここにはできるだけ多くの老人を参加させることにしているので，接触する老人数はかなり多い．だが，重度の障害者の場合の誤嚥などの危険防止のためもあって，寮母が付添うことになっているため，ついボランティアとの間にミゾがつくられてしまうことも多い．

しかし，コーナーの常連であるMさんは，毎月手づくりのおはぎを持参するボランティアの一人との間に深い信頼関係ができあがったのであろう．冒頭の「ボランティアの奥さんと話をするのは〝生(なま)〟やさかえ……」という実感を洩し，事実，2人の実娘との間を断たれ，かつ大腿骨骨折のために長年車イス生活をおくっていながら，まったく明るさを失うことなく施設生活をエンジョイするようになっている．

技術面では，各種教室の指導とカットや理容サービスなどがある．前者は，リハビリをかねたクラブ活動であるが，どうしても技術指導という点に重点がおかれ易く，重度障害老人には適さないという一面がある．しかし，くみひも，陶芸，造花などは創造性を刺激するという面で効果的である．後者は3グループのボランティアがあり，老人のほとんどがその恩恵にあずかっている．が，なにぶんにも時間的制約があり，老人1人当りの接触時間はごく短かい．そのうえ，年金制度が充実してきたことや，老人の家族に経済的扶養能力のある人も多くなってきたためか，カットや理容の仕方の良否にたいして評価する老人が目立ってきたことは，今後の施設ボランティアのあり方を考えるうえで反省すべき点といえよう．

II　当荘ボランティアの特性

上述のような稀有なボランティア活動は，いったいどのような人たちによってなされているのであろうか．

本項は，筆者がたまたま招ねかれた年1回恒例の「梅寿荘ボランティア懇親会」（'82年6月）の席をかり，アンケート調査した資料をもとに考察してみよう．回答者は57名であったが，当荘のボランティアでない人12名と集計の都合上唯一の男性1名を除外し，女性

44名にかぎって集計した．

当荘の定期ボランティアは182名を数えているので，本調査はその22.2%弱を対象者とした考察ということになる．なお，紙面の都合上，数的データは極力省略したが，ボランティアの特性記述も要点だけに止めざるをえなかったことをお断わりしておく．

a)　世代，学歴，職業，子ども，夫の有無など

世代別にみたのが，4表である．40代が約半数を占め，ついで30代，50代が各々約4分

（4表）世　代　別

年　齢	20代	30代	40代	50代	50代以上	計
人　数	1	11	20	10	2	44
%	2.3	25	45.5	22.7	4.5	100

の1を占めている．学歴面では高卒（旧高女卒をもふくむ）が圧倒的に多く（75%），短大卒以上の人も6名（14%弱）いるが，義務教育のみはわずか3名にすぎない．まは主婦専業者が84%を占め，子どもあり（75%），夫あり（96%）ということになり，夫なしの2名はいずれも死別，未婚はゼロである．

ボランティアの属性を要約すれば，教育程度は概して高く，40代を中心としたいわば安定した主婦層ということになろうか．

b)　ボランティア活動参加の動機，経験，継続の意志など

動機でもっとも多いのは先記の「愛護会の誘い」によるものと「社会参加がしたかった」であり，いずれも27%強であり，「自主的な集団だから」（18.2%）とか「老人に接したいから」（11%弱）などがみられる．

ボランティア経験でもっとも多いのは「1年未満」（32%弱）で，つぎが「3年以上～5年未満」（30%弱）である．また，継続の意志があるかどうかについては，じつに91%弱の人たちが「ある」（40名）とこたえ，「早く止めたい」は1名のみあったが，この人は70歳近い方である．

ボランティアという外来語の意味を語源論的に求めることは止めるが，梅寿荘ボランティア隆盛の根源には，「いこま保育園」と「愛護会の誘い」なくしては到底考えられないものがある．近隣社会とはつながりの薄いニューファミリー層の主婦たちも，子どもの育成（保育園）を通して連帯し(コミュニティづくり)，ボランティア活動の動機づけを得るというわが国社会の一般的図式が，前項で述べた宝山寺社会事業団という社会的・組織的な背景の中で，見事に結実した事例といえよう．その証拠に，「社会参加がしたい」とした人の多くが，同時に「愛護会の誘い」と複数回答していることからも容易に推測される．

c)　ボランティアのみた当荘の老人観と活動によって得られたもの

まず，ボランティア活動に入る以前，当荘にはどのような老人がいると思っていたか，という設問については，「からだの不自由な人」「世話をしてもらう人のいない人」がそれぞれ約3分の1弱（32%）でもっとも多く，「家族のない人」が21%，また「貧しい人」「ボケた人」などはごくわずかである．

活動後に，当荘で接した老人にたいしては，3分の2（75%）もの人たちが，「とても明るい」「明るい」「まあ明るい」など，いわゆるポジティブな感覚でとらえ，「少し暗い」「暗い」などネガティブな印象をもった人はわずか（9%強）であり，「とても暗い」は1名もない．が，「どうともいえない」「無回答」の人が16%弱もあったのは，どう解釈す

べきか．

さて，彼女たちはボランティア活動をとおして，いったい何が得られたのであろうか．ボランティア活動の基本的性格は，自発性，奉仕性，無償性だといわれる．しかし，果してそういった美辞や観念だけで人は行動し，かつそれを持続することが可能な生物であろうか．

奉仕性や無償性とはいえ，そうした行為による反対給付として，人はかならず何んらかの利益を期待し，かつそれが確認されてはじめて持続的行為となる．事実，「自分の生き方を考えさせられた」が40％でもっとも多く，ついで「人間関係のあり方を学んだ」が23％，また「老人の心理の理解」(21％強)，「福祉の仕組の理解」(11％強)，「老人の介護法を学んだ」(4％強）の順になる．

いずれにしろ，ボランティア活動の本質は，けっして他愛的奉仕性や無償性にのみあるのではなく，むしろより高度な自己認知や向上，自己実現といった自分の精神的・社会的な幸福追求のためにあると断言すべきであろう．

d)　**ボランティア自身の老後観など**

では，ボランティア自身が，老後，からだが不自由になったときどこで生活したいと望んでいるのか．予想どおり，もっとも多くの人たちは「子どもとの同居」を望んでいる（35％強）が，「特養入所」と回答した人も意外に多く（27％強），驚かされた．タテマエ回答ではないかと，いっしゅん考えたものである．だが，「在宅でヘルパーの介護を受けたい」人は25％もあり（ただし，「公的ヘルパーを頼む」が17％弱，「自費のヘルパーを」が8％強」)，概して子ども依存型が少ない点，さすがと感じさせられるものがある．「病院」はわずか3名（6％強)，　また「その他」も3名だが，うち2名は「地域ボランティアと公的ヘルパーの協力」，「友人の援助」とそれぞれ記入している．

しかし，何んらかの理由でどうしても特養施設に入らなければならないとしたら，どのような特養をえらぶか．彼女らの3分の1は「地域の中にある」特養を望み（36％強)，「環境のよい処」(22％強)，「医療の完備した処」(21％弱）がそれにつづき，「遠くとも設備のよい処」(9％弱)，「宗教関係」(7％弱）はいずれもごくわずかである．

さて，ボランティア活動をとおし，彼女たちは特養施設の性格をかなりよく理解し学んでいることはたしかである．おそらく，施設に一度も足を踏み入れたことのない一般主婦層とくらべ，彼女たちの内部には“意識革命”ともいうべき質的差異が生じているといっても過言ではなかろう．そうした点は，たとえば，自分が将来特養に入所するとしたらどのような処をえらぶか，という設問にたいする回答の中にも明確に示されている．つまり，ボランティアたちは，医療の完備した施設とか，遠くとも設備の整った処とかを選ばず，むしろ地域内にある施設を選択する人たちがひじょうに多いという事実からも，容易に推察される．

社会的自我の成長，すなわち“子離れ家離れ”意識の確立と並行した施設社会化，そしてコミュニティぐるみのケアへの期待感の醸成は，こうしたボランティアの実践活動をへてますます社会的な拡がりをえ，かつ深く滲透していくにちがいない．

Ⅲ　当荘ボランティア活動の限界と方向

さて，当荘におけるこうした盛んなボランティア活動は，単調で受動的な老人の施設生活に“生(なま)”の外気を注入し，明るさや活気をあたえるのに大きな影響力となっている．たとえば，“人見しりしない”という社会性の回復とか，無為や受身的生活から生じるボケ

予防のメリットその他さまざまである．

事実，本年（'82年）3月，当荘が，県立奈良病院看護専門学校生33名の実習を受入れたとき，実習依頼のために来荘した教官自身が，「静かなホーム生活を乱し，お年寄りの心身に悪影響をあたえたら……」と，懸念されたのであった．たしかに，実習生よりはるかに少数の寮母（24名）が彼女らを受け入れ，指導することは老人にたいするケア量を大はばに減らすことになり，生命力の枯れた老人たちをいたずらに刺激するというマイナス効果を生じかねない面もある．

だが，毎日数名のボランティアが入れ替わり常時来訪している当荘の老人には，そうした外部刺激をプラスに転化させるだけの，かなりな弾力性（トレーランス）が形成されていると確信できたのである．予想どおり，3日間の実習がおわった後の老人たちは，「大波が引いたようやな」，「かわいらしい子やった」などといい，なつかしがるだけでなくむしろ再度の来荘を願うというふうであった．ボランティア活動の効果は，こんな面でも大きい．

しかし，こうした効果も一人一人の老人の心の壁の奥にまで滲透するほどの影響力をもつかどうかの点については，筆者らにも疑問がある．

「はじめに」にも若干ふれておいたが，当荘老人の信頼感のウエイトはどのような人たちに向けられているかを確認するため，昨年度の当荘老人にたいする意識調査の中に，2つの質問項目を入れたのであった．1つは「さいごは誰れにみとられて死にたいか」，2つは「悩みごとは主として誰れにうちあけるか」である．それによると，みとられて死にたい人物は「家族」であり72名中49人（68%）を占め，「寮母」は17名（23%），「昔の友人」と「施設長」が各1名，他はゼロであった．また，悩みをうちあける相手は，「職員」が32名（内訳では「寮母」が28名）で44%，「家族」が7名（1%），「ホームの友人」，「外の知人」がおのおの1名，「その他」が31名あったが，「ボランティア」をあげた老人は前者の場合と同様に1人もいなかったのである．

対象となった老人72名は，いずれも強度の難聴や言語障害，痴呆の人たちは除かれており，ボランティアの人たちとの接触はかなり多い老人たちである．こうしてみると，ボランティアの老人にあたえる影響力には一定の限界があること，すなわち非プロ（素人）としての立場上それも当然のことというべきであろうか．

しかし一方，当荘の“脱アノミー化”老人にかんする事例研究をすすめてみると，ボランティアの活動がいかに大きな力となっているかも明らかになってくる．ちなみに，タンストールの「社会的植物人間化の測定[6]」を参考に，当荘のケース記録や寮母日記などをもとにアノミー化度の測定をかなり大胆ではあるが行なってみたところ，当荘にはアノミー化度「強」の老人が6名，「中」の老人が4名いることが判明した．が，彼ら10名のいずれもがボランティアによるクラブ活動その他に一切参加していない（したこともない）ことが判明したのである．

ところが，入所時にアノミー化度「強」と判断された他の3名と「中」の3名，計6名の老人は，現在，排泄は自立し言語も普通，歩行も器具を用いる2名以外は全く自立しているが，いずれもクラブ活動および行事に参加している老人たちであり，社会的孤立の状態はかげさえもみられない．

たとえば，K子さん（71歳）は，入荘以前（2年10カ月）にもたしかにADL面でほぼ自立し，視力や聴力，知的能力の衰えもあまり認められなかった．しかし，テレビや新聞にも全く関心を示さず，ただ1日中ボンヤリとベットの中で眼をつぶって過すという一種

の植物人間化した状態であった．それが，たまたま誘われて活花教室に参加したときから一変した．自分の身辺整理をはじめ，体力のない老人の世話も熱心にやり，クラブ活動や諸行事にも積極的に参加し，笑顔もたえなくなったのである．

タンストールも述べているように，植物人間化し易いグループには，配偶者喪失者，独身，子どものいない老人などが多く，また社会階層からいえば筋肉労働者のほうが事務的労働者よりアノミー化し易い[7]ようである．当荘においても，家族関係に問題の多い老人にそれが目立ち，また身体的に重い障害をもっているために移動とか他人とのコミニュケーションが不自由だという負目があり，いきおい自閉的になり，クラブ活動や行事にほとんど参加しない老人に多くみられる．換言すれば，アノミー化し易い老人とは，ともすればステレオタイプに陥り易い職員オンリーの“上から”の一方的な処遇のもとに施設生活をおくってしまう人たちともいえる．職員オンリーのそうした処遇の潤滑油ともなり，老人たちに生(なま)の実感をあたえるためのボランティア活動の意味は甚だ大きい．

おわりに

以上，梅寿荘におけるボランティア活動の実態，ボランティアの特性，限界，方向性などについて述べてきたが，結論としては，ボランティア活動がコミュニティぐるみの運動として生かされ，それが施設老人の心に“生(なま)”の，そして実体あるものとして響きかえる（レスポンス）こと，またそうあることこそが，ボランティア活動の真姿だということに尽きる．

そのためには，施設老人をめぐり，職員とボランティアがともにコミュニティづくりという共通の広場に立ち，共感（エンパシーであってシンパシーでは断じてない）的な世界を築きあげていく以外にない．筆者はそれを「心のベルト」をかけ合うといい，「社会的属性のベルト」（地位や役割，価値観，利害関係などの相違によるフォーマル・コミュニケーション）とは異なった次元のもの（たとえば自己実現，愛，受容，感動など）としている[8]．が，いまはそれにふれる余裕はない．

コミュニティづくりという言葉を使用した以上，それについての概念も理論的に整理したい[9]．アノミーやボランティアという言葉についても然りである．が，そうする紙幅ももちろんない．寛容願う次第である．

さいごに，過去6年間にわたり，貴重な調査フィールドと援助を惜しみなく提供して下さった辻村泰範先生（梅寿荘施設長，宝山寺福祉事業団理事），また故・辻村泰円先生（前，同上），それにアンケート調査に快く応じて下さったボランティアの方々，その他関係者の皆さまに厚くお礼申上げる．

注

1. 特別養護老人ホーム・梅寿荘は，社会福祉法人・宝山寺福祉事業団（理事長・松本実道氏，奈良県生駒市元町）の社会福祉事業の一貫として昭和47年8月・故・辻村泰圓氏によって創立されたものである．ベット数110，エレベートバス，喫茶コーナー，陶器焼成窯，ミニゴルフ場，寝台付き輸送車等の設備や付設診療所などもあり，寮母23名（看護婦3）その他の職員をかかえている．なお，同事業団は，梅寿荘の他に児童福祉法による愛染寮，極楽均保育園，宝山寺児童遊園，いこま保育園，いこま乳児院，いこま乳児保育園，仔鹿園，平城野外流動研修センター，また社会福祉事業法による療育相談施設・奈県仔鹿園などの経営を行なっている．
2. 片野卓「老人の“死にゆく過程”と“適応”に関する社会心理学的研究」奈良大学紀要第7号昭和53年

片野卓「老人の“死にゆく過程”と精神，心理的ケアの必要性」同上，第8号，昭和54年．
片野卓「老人ホーム職員の処遇姿勢に関する研究」同上，第9号，昭和55年．
片野卓「長生きする老人の条件」同上，第10号，昭和56年．
3. 加藤正明「社会と精神病理」弘文堂，323頁以下参照．昭和51年．
4. 森幹夫「老人問題とは何か」ミネルバ書房，78年，26頁．
5. 浅野仁「老人福祉とボランティア活動」『高齢化社会と老人問題』ジュリスト，No. 12，有斐閣，昭和53年．
6. J・タンストール，光信隆夫訳「老いと孤独」垣内出版，昭和53年，130頁．
7. J・タンストール，同上，134頁．
8. 片野卓「Tグループによる職場活性化の方法」ダイヤモンド社，昭和56年，45頁．
9. 片野卓ら「精神衛生」建帛社，昭和44年，148頁以下．
10. 調査票紹介

アンケート

年齢　才代　職業 有 無　子供 有 無　夫 有 無

学歴　義務教育（新中・旧高女）　高校（旧中・女学校）　短大　大学
旧専門学校（旧師範学校）

1. 梅寿荘のボランティアを始めて何年になりますか．　約　年
2. 月（年）何回来られますか．　月　回（年　回）
3. 始められた動機は何ですか．
   (イ)保育園の愛護会の誘い　(ロ)地域の婦人会の誘い
   (ハ)自主的な集団（宗教を含む）だから　(ニ)老人に接したいから
   (ホ)自分の技能を役立てたい　(ヘ)社会参加がしたい
   (ト)その他（具体的に）
4. ボランティアを始める前，梅寿荘の老人をどんな人と思っておられましたか．
   (イ)貧しい人　(ロ)家族のない人　(ハ)体の不自由な人　(ニ)ボケた人
   (ホ)世話をする人がない可愛そうな人　(ヘ)ホームで気楽に暮している人
   (ト)その他
5. 梅寿荘の老人には，概して，どんな感じの人が多いと思われますか．
   (イ)とても明るい　(ロ)明るい　(ハ)まあまあ明るい　(ニ)少し暗い　(ホ)暗い
   (ヘ)とても暗い　(ト)どちらとも言えないい
6. 今後もこのボランティアを続けられますか．
   (イ)続けたい　(ロ)もうしばらくやる　(ハ)早くやめたい
   （やめたい理由を具体的に）
7. 梅寿荘に来られて，時に不快な感じを持たれることがあるとすれば，次のどの人間関係ですか．
   (イ)職員との　(ロ)ボランティア同志の　(ハ)老人との
8. 梅寿荘に来られて，あなたの得られたものは何ですか
   (イ)福祉の仕組みの理解　(ロ)老人の心理の理解　(ハ)老人の介護法を学んだ
   (ニ)人間関係のあり方を学んだ　(ホ)自分の生き方（老後を含む）を考えさせられた
   (ヘ)得るものなし　(ト)その他（具体的に）
9. 老後，体が不自由になったら，どこで生活したいと思われますか．
   (イ)病院　(ロ)子供と同居　(ハ)在宅で公的ヘルパー　(ニ)在宅で自費の介護者を
   (ホ)特養　(ヘ)その他
10. もし特養に入るとしたら，どんな所を希望されますか．
   (イ)地域の中にあるホーム　(ロ)遠くても設備の良い所　(ハ)宗教関係
   (ニ)医療の完備した所　(ホ)環境の良い所　(ヘ)その他（具体的に）

Summary

This research is to follow already published my four papers.

In the nursing home, Baiju-so, located in Ikoma, Nara Prefecture, volunteers' activities have been very remarkable. It may be said that these activities have been almost more noticeable than anywhere else not only in Nara but all over Japan. As many as 1500 volunteers a year have been doing their services actively.

This research is aimed at illustrating the following 5 points, that is,

(1) how active such volunteers' services,

(2) content of their diverse activities,

(3) time-study in contact with the aged,

(4) social background of the volunteers' and their consciousness in doing their activities,

(5) effects and bounds of their activities,

(6) their activities in relation to the community concerning with them.

In this research the problems above mentioned are intended to be sociologically demonstrated.